

十八世看病記

洞光大和尚(父)は、略歴にあるとおり神谷恒七、きし乃の三男として北海道で出生、出家前は孝三の名であった。父恒七は岐阜県坂内村川上出身、孝三は縁あって福井県丸岡町長昌寺に小僧として預けられることになる。長男は福井市内で靴の卸問屋を始めるが昭和五十八年に六十五歳にて死去、二男は昭和十九年大東亜戦争で戦死(享年二十五歳)、妹は昭和二年生まれてまもなく亡くなっている。姉は長昌寺に嫁ぐが四十八歳にて永眠。兄弟の中で孝三人、出家して洞光となり八十六歳まで生き残る。平成十九年六月十一日午後一時十一分肺炎にて死去す。

五十代の頃から虚血性心疾患、慢性心不全となっていたが、平成六年に心臓バイパス手術、僧帽弁置換手術をしてから結果は良好、容態は安定する。しかしながらいつも何かをしていないと気が済まない性格故、ロータークラブ、永平寺、保護司等で身体のことはそっちのけで動き回り続ける。しかし段々と身体は老化、元気になる薬も山ほど飲んだが功を奏さず、車の運転もままならず、長年乗りなれた愛車は九月に廃車にし、それでも出かけたがため、電動バイク(足が悪くうまく歩けない人が乗る)を購入、それも一ヶ月足らずで乗れなくなり車庫に入

ったまま。

昨年十二月からは度重なる転倒による慢性硬膜下血腫のため歩行困難となり、医療用ベッドを借りての在宅介護生活を余儀なくされた。寝たきりになってからは週一回主治医の往診治療、ヘルパーさん、住職、妻二人での介護(といっても主に嫁である妻の献身的な看病と身の回りの世話)、要介護(4)、移動入浴、ヘルパーさん、ウエルネス中条へのショートステイも何回か通う。自分では歩けるつもりなのか、ベッドから幾度となく転落、その度によいしょと持ち上げる。次第に食が細くなり腕も足も骨と皮の状態、抱きかかえベッドに戻す度に身体が軽くなってきているのを感じた。五月からは要介護最高の(5)となり、最後は肺炎を併発、亡くなる十日程前からは食事もできなくなり、主治医の先生も毎日往診、容態を見守ってくれた。住職もベッド横で寝ることに。

亡くなる最後の晩、妻と二人、ベッドの側で深夜遅くまで老僧の生き様を振り返る。「いろいろあった人でした」、横で聴いていたのかのように、翌六月十一日午後一時十一分、容態急変、息苦しくなつてアツと小声で叫び息絶える。妻と二人、老僧の手を握りしめ最後を看取る。

「いままで有難うございました。御苦労様でした。良いご縁でした。安らかに。」

お盆 8月13日夕方からはお墓参りお寺参りです！

* お墓にお供えの盆菓子、果物等はカラスが食い荒らしますのでお参り後お持ち帰りください。